

[論文]

『西東詩集』：「ズライカの巻」について（I）

鈴木 邦 武

ゲーテは『朝刊紙 (Morgenblatt)』での予告の中で「ズライカの巻」について次のように述べている。

「情熱的な詩を含むズライカの巻は、次ぎのような点で愛の巻とは異なっている。つまり、愛人の名が告げられていること、その愛人は明確な性格をもって現われ、それどころか個人的には詩人として登場し、老年の域に達している詩人と楽しい若々しさを示しながら燃えるような情熱という点で競い合うように見えるということにおいて。そしてこの対話劇が演じられる地域はペルシアである。またここでは精神的な意味が湧いてき、地上の愛のヴェールがより高い関係を隠しているように見える。」¹⁾

こうゲーテが予告しているように、この巻ではゲーテと人妻マリアンネ・ヴィレマーの恋がオリエントの装いの中で展開されて行くことになる。

1814年7月25日の早朝ゲーテはヴァイマルを出立、アイゼナハ、フルダを経て郷里に向かう。この日制作された「現象」（「歌びとの巻」の9番目）と題する詩の中に次のような1節がある

だから、快活な老人よ
悲しむことはない
たとえ髪が白かろうと
おまえは愛することになるだろう²⁾

この時、彼はまだマリアンネの存在さえ知ってはいなかった。それなのに、自分が恋することになることを予感しているようであった。ともあれ、目的地としていたヴィースバーデンに到着したのは7月29日の夕方であった。ここでゲーテは故郷の様々な懐かしい友人達に出会っているが、そのゲーテの所に8月4日旧知のヴィレマー (Johann Jakob von Willemer, 1760-1838) が訪ねてくる。マリアンネ (Marianne Jung, 1784-1860) を伴ってであった。その後ゲーテは9月15日に初めてマイン河畔にあるヴィレマーの別荘ゲルバーミューレを訪れ、18日にも訪ねてマリアンネにも会っている。

マリアンネはオーストリアのレンツに楽器製造人の娘として1784年に生まれるが、14歳の時に母親と共にバレエマスターのトラウプの一团に加わってフランクフルトまでやって来、そこでの上演の際に歌とダンスの役で人々を魅了したとのことであった。フランク

フルトの劇場とも関わりを持っていたヴィレマーはそのマリアンネに興味をそそられ、彼女の母親に十分な年金を与えて彼女を養女として自分の家に引き取り、自分の4人の子供たちと一緒に教育した。ヴィレマーはこの時まで2度結婚していたが2度とも妻に先立たれていて、この時は独身であった。1814年9月27日にヴィレマーは正式の手続を省略したままマリアンネと結婚した。

9月24日から10月8日まで、ゲーテはヴィースバーデンを離れてハイデルベルクにズルピッツ・ボワスレー (Sulpiz Boisserée, 1783-1854) を訪ね、ボワスレーが収集した中世の低地ドイツの美術品の鑑賞を楽しんだ。そして10月11日にフランクフルトに戻り、翌日ゲルバーミュレを訪ねる。この時、ヴィレマーが不在であったので、その妻となっていたマリアンネと食事を共にし、2人で話し合い楽しい一時を過ごしている。10月18日にはヴィレマーのミュールベルクのブドウ山にある山荘から前年行われたライプツィヒでの戦勝を祝う花火をヴィレマー家の人々と共に楽しみ、翌日もヴィレマー家を訪れて食事を共にしている。その後、10月20日にはフランクフルトを立って、ハーナウ、アイゼナハを経て10月27日にヴァイマルに帰っている。そして翌年の1815年5月24日に再度ライン・マイン・ネッカー地方への旅に出るのであるが、この日、旅の途上で、恋人をズライカと命名する詩が作られる。これは、「ズライカの巻」の2番目に収められた。

ズライカがユスフに心をひかれたことは
自然のこと
ユスフは若かった、若さはそれだけで恵ま

れている
彼は人を魅するほど美しかったといわれている
彼女も美しかったから、互いに相手を幸せにすることが出来た
だがこんなにも私が待ちこがれていたあなた
が
喜ばしい若々しい視線を私に送って
今私を愛していて、これからも私を幸せにしてくれるということ
そのことを私は歌で称えたい
私のために永遠にズライカと呼びたい³⁾

そしてこの詩が制作された同じ日に「ズライカの巻」の3番目の次の詩も作られている。

上の詩でズライカの相手としてユスフが登場しており、「愛の巻」の「模範」と題する詩の中でもズライカの相手はユスフであった。しかしゲーテはオリエントの恋の世界の中で展開されるズライカの相手としての自分を表す名として若くて美しいユスフという名を用いるにはためらいを感じた。その名に変えてハーテムを用いることになる。

今やあなたがズライカと呼ばれたのだから
私にも名が付けられて然るべきであろう
あなたが恋人を称えるときには
ハーテム！ これを名前としてください
それで私を認識していただければいいのです
思い上がりのつもりではないのです
聖ゲオルゲの騎士と名乗る者が
直ちに聖ゲオルゲであると考えたりは致しません
私のこの貧しい状態で
すべてを与えるハーテム・タイになればし

ません
すべての詩人の中で最も豊かに生きた
ハーテム・ツォグライになりたいとも思
いません

しかしこの二人を念頭におくことは
全く非難すべきことにはならないでしょう
幸せの贈りものを受け取り、与えることは
いつでも大きな喜びでありましょう
愛し合いながら互いに爽やかにし合うこと
は
天国での至福でありましょう⁴⁾

ハーテム・タイはイスラーム以前の騎士の
中で教養などの点で最も完成した人物の典型
とされた、6世紀後半に活躍した詩人で、戦
いにおいては常に勝利し、被征服者に対して
は寛大でその寛容さとホスピタリティのため
に天下周知の存在であったといわれる。ハー
テム・ツォグライという人物は存在していな
かったようで、ツグライ (Muayyad al-Din
Abu Ismail al-Husayn b. Ali al-Munshi
al-Isbahani al-Tughray, 1061-1121) のこと
だと推定されている。⁵⁾ ツグライは、イスハ
ーン生まれの詩人で錬金術者、セルジュー
ク王朝の役人であったが、政争に巻き込まれ
て殺される。⁶⁾ ゲーテはこの人物について知
るのは友人のクネーベルを通してであった。
クネーベルは彼が翻訳したツグライの詩集
『アラビア悲歌 (arabische Elegie)』を1815
年4月にゲーテに贈っている。上の詩が作ら
れる少し前のことである。⁷⁾

このように既にライン・マイン・ネッカル
方面への旅立ちの最初の日には、自分をハー
テムとマリアンネをズライカと命名してオリ
エントの世界の中でオリエント風の愛の世界

を展開させる舞台が作り上げられていた。
「ズライカの巻」でこれら二つの詩の前に置
かれている最初の詩はその世界への恋人に対
する誘いの詩である。

誘い

この日から逃れてはならぬ
あなたが急ぎ求めるその日が
今日という日より良くはないのだから
私があの世界を引き寄せるため
この世界を遠ざけるところに
あなたが喜んで留まるならば
あなたも、私と同じく、安全
今日は今日かぎり、明日もまた明日だけ⁸⁾

そしてこの詩は、1814年の12月31日に
出来上がっていることからみると、既にこの時
点でゲーテの中ではマリアンネが恋人として
大きな存在となっていたと考えられる。ゲー
テは1814年の夏のフランクフルト滞在中、
最初の8月4日の出会を含めると7度程マリ
アンネに会っている。⁹⁾ 特に、10月12日の出
会いはマリアンネには忘れ難いこととなってい
たようで、ゲーテがフランクフルトに残してお
いたサイン帳をヴィレマーがゲーテに送り届
ける際に付した1814年12月12日付の手紙に
添えて彼女は1814年10月12日の日付で次の
ような詩を送っている。

私はおちびさんの仲間に加わります
あなたは私を愛するおちびさんとよんでく
ださいました
あなたがずっとそう私を呼んでくださるな
ら

私はいつも嬉しい気持でそう自分を呼ぶことにします

喜んで生涯そうします

長くそして広く、広くそして長く

人々はあなたを偉大な方と認めています

あなたを最善なお方と尊敬しております

あなたを見れば、愛さずにはおられません

あなたが私たちのもとに居てくださるなら

あなたなしには時は輝くことはないでしょう

う

長くそして広く、広くそして長く

あなたを脳裏の中に収めおきます

あなたを心の中に留めおきます

今私はぜひともサイン帳の中に

ご好意の贈りものを持ちたいと思います

長くそして広く、広くそして長く

でも私はおとなしく沈黙します

この詩にこころをお寄せください

おお主よつじつまの合わないちびを

処罰しないでください

あわれみからそれを見てください

長くそして広く、広くそして長く¹⁰⁾

この詩の各節の終わりで「長くそして広く、広くそして長く (Lang wie breit und breit wie lang) と繰り返される1行はゲーテが会話の中などで好んで用いた表現であると言われている。この句を節ごとの終わりで繰り返していることから、ゲーテのことがマリアンネの心のなかに深く刻み込まれていることを窺わせていて、マリアンネの思いが込められた詩であるといえる。そしてこの詩は1814

年12月14日にイエナに居たゲーテに届けられたものと推定されている。¹¹⁾「誘い」の詩が制作される少し前のことである。

「ズライカの巻」には、上にあげた三つの詩の前に次のような「前のことば」が見られる。

私は夜に思った

寝ていて月をみたど

しかし目を覚ますと

思いがけず太陽が昇った

(Ich gedachte in der Nacht

Daß ich den Mond sähe im Schlaf

Als ich aber erwachte

Ging unvermuthet die Sonne auf.)¹²⁾

これはディーツが『アジア回想録』の中の12番目に収めた「詩人そして才子としての、元首そして人間としてのセリム I 世」という論考でセリム I 世について語っていて、そのセリム I 世の2行詩として紹介している次の詩句をそのまま2行を4行に変えただけで用いたものである。

Ich gedachte in der Nacht, dass ich den Mond sähe im Schlaf

Als ich aber erwachte, gieng unvermuthet die Sonne auf.¹³⁾

セリム I 世は、ディーツによると、「1467年に生まれ、オスマン帝国を1512年から1520年までの9年間治め、この短い年間にシリア、エジプト、メソポタミア、アラビア、それにペルシアの数箇所の地域を征服した。」

「また彼は父親を王位から退かせ、ふたりの兄弟をその子どもたちも含めて殺害してしまう。彼は処罰にも厳しく無慈悲であったので冷血漢とも呼ばれていた」¹⁴⁾ということである。

ディーツはこの2行詩に「月と太陽はここでは美しい人あるいは恋人のことであり、美しさの点では二つの天体のように区別される」¹⁵⁾と注記している。この朝になって昇り行く太陽がオリエントの世界の中でハーテムとなったゲーテにとっての恋人ズライカである。ハーテムとズライカの相聞の歌が交わされることになり、それが「ズライカの巻」の4番目の詩から展開される。

ハーテム

機会が泥棒を作るのではありません
機会そのものが最大の泥棒なのです
なぜならそれは私の心の中にまだ残っていた

愛の残りを盗んでしまったのですから

それは私が全生涯にわたって得たものを
あなたに渡してしまったのです
ですから私は貧しくなって私の命を
ただあなたから待ち受けるのみです

でも私はもうあなたのルビーのように輝く
視線の中に
あわれみを感じます
そして私はあなたの腕の中で
新たにされた運命を楽しむのです¹⁶⁾

「私が全生涯にわたって得た愛の残りのす

べてを機会が盗んであなたに渡してしまった、貧しくなった私は私の命をあなたから待ち受ける」という相聞の歌の初めに相応しい愛の告白である。1815年9月12日の作でマリアンネに贈られた最初の詩編である。

ゲーテはこの年5月24日にヴァイマルを出発して27日にヴィースバーデンに到着、途中鉱山長官クラマーと近隣の町を訪問したり、ナッサウで出会ったフォン・シュタイン男爵と共にケルンまで北上したりしているが、主にヴィースバーデン温泉に逗留し、その後8月12日からはフランクフルトのヴィレマーの家や郊外のゲルバーミュレの別荘の客人となってマリアンネと共に過ごす機会を持った。上の詩もその際に渡されたものと思われる。「ズライカの巻」の5番目の次の詩はハーテムの呼びかけに対してのズライカの返答である。

ズライカ

あなたの愛の中でとても幸せななので
私は機会をとがめは致しません
機会があなたにとって泥棒だったとしても
そのような盗みは私には何と嬉しいことでしょう

でもなんのための盗みなのでしょう
進んであなたを私にお与え下さい
私の方は喜んで信じたいのです
そうです、あなたを盗んだのは私なので
と

あなたが早く与えてくださったものは
あなたに素晴らしい利益をもたらします

私の安らぎ、わたしの豊かな命を
私は喜んで差し上げます、お受け取りくだ
さい

冗談はお止めください！貧しくなったなん
て、とんでもございません！

愛は私たちを豊かにしてくれてはいません
か

あなたをこの腕の中に迎え入れるとき
私の幸福はどんな幸福にも劣りません¹⁷⁾

この詩はマリアンネ自身の作に基づいてい
る。つまり、マリアンネはゲーテから前の詩
を贈られた後で、それへの返り歌しとして制
作したのである。この詩がマリアンネの作で
あることを彼女は後になってヘルマン・グリ
ム (Herman Grimm, 1828-1901) に伝えて
いる。¹⁸⁾ 心の高鳴りを感じさせる詩であるが、
元の詩では上の詩の第3節の3行目「私の豊
かな命」は「私の命のすべて」となっていた。
それをゲーテは改変してここに取り上げてい
る。元のままだ良かったというのが一般的な
見方である。彼女はゲーテをめぐる女性のう
ちでただ1人詩人であった。¹⁹⁾

「ズライカの巻」の6番目の詩

恋する者は道に迷うことはないだろう
たとえ周囲がどんなにくらくても
ライラとメジュヌーンがよみがえるならば
彼らは恋の道を私から教わるだろう²⁰⁾

ライラーとメジュヌーン (マジユヌーン)
については「愛の巻」の「模範」という詩の
中で取り上げられている。²¹⁾ また、最後の2
行は「もしライラとメジュヌーンが再び蘇っ

たら、かれらはわたしの本から恋の術を学ぶ
だろう」というサーディーの『ペルシアの薔
薇園』からの引用である。²²⁾ オリエントに関
する文献を借り出した1815年1月8日から10
月26日の間の作とされる。

「ズライカの巻」の7番目の詩

私が愛するあなたを愛撫し、
すばらしい声の響きを聞き分けることが可
能だろうか

バラはいつも考えられないように思え、
サヨナキドリは想像を絶するように思え
る²³⁾

バラの美しさはこの世のものとは思えない、
また、サヨナキドリの鳴く声は何をかたるか
想像もつかない。それなのにバラのように美
しいあなたを胸に抱き、すばらしいあなたの
声のささやきを聞き分けるというようなこと
がこの世のこととしてあり得ましようか。そ
んな風に歌っているものと考えられる。バラ
もサヨナキドリも愛の想像の中で捉えられて
いる。1815年10月26日以前の作とされる。

「ズライカの巻」の8番目の詩

ズライカ

私が船をユーフラテス川に浮かべていまし
たところ

あなたから頂いたばかりの
金の指輪が指から抜け落ちて

水の深みに落ちてしまいました

そのように私は夢を見ました、朝焼けが
木の間を通して目にきらめいてきました
詩人よ言って下さい、予言者よ言って下さ

い

この夢は何を意味しているのでしょうか²⁴⁾

ズライカが指輪を川に落としてしまって不安がるのをなだめてハーテムは次に続く詩の中で答える。この二つの詩は同じ日にできていて、対を成している。

「ズライカの巻」の9番目の詩

ハーテム

そのことの意味を解いてあげましょう
ヴェネツィアの総督が
海と結婚式を挙げたことを
私はあなたに何度も話してあげたのではない
ですか

それと同じように、あなたの指から
指輪がユーフラテス川に落ちたのです
甘い夢よ、おまえは私を感動させて
沢山の素晴らしい歌を作らせてくれる

新しい隊商と共に
紅海まで行くために
ヒンドスタンから
ダマスカスまで旅した私

その私を、あなたは、あなたの川と
大地と、この森とに、娶わせてくれます
ここで最後の口づけをするまで
私の心をあなたに捧げます²⁵⁾

ハーテム・ゲータはマリアンネに指輪を贈った。それを彼女はマイン川に落としてしまっ

た夢をみる。オリエントの世界を旅していたハーテムはその指輪によって、彼女のいる辺り、マイン川のゲルバーミュレと結び付けられたというように夢が解かれる。そこに海に指輪を投げて海との関わり強めようとするヴェネツィアの総督の話が結び合わされてくる。2人の結びつきが見事に表現されているという訳である。

「ズライカの巻」の10番目の詩

男の人たちの視線はよく分っております
「ある人は、愛している、悩んでいる
私は欲している、いや、絶望している」と
言っております
その他もろもろのことは娘でも分ります
それら全ては私にはなんの役にも立ちませ
ん

私の心を感動させることはありません
ですが、ハーテム、あなたの視線こそ
まずこの1日に輝きを与えます
こんな風に言っていますから「この人は
比べるものがないくらい、私には気に入っ
ている

すべての庭の飾りであり、名誉である
バラをみても、ユリをみても
大地の装いのために駆り立てられた
糸杉やミルテやスマレをみても
彼女が飾られると奇蹟のようだ
私たちを驚きをもって包み
私たちを引き立て、癒し、祝福してくれる
それで私たちはまた健やかになるのを感じ
る
また病むのを望むくらいだ」

こう言ってあなたはズライカを御覧になりました

そして病みつつ健やかに
 健やかになりつつ病まれました
 この世のだれにもしたことのないように
 微笑まれ、私の方を御覧になりました
 そしてズライカはその眼差しの
 永遠の言葉、「この人を、比べるものがな
 いくらい、
 私は気に入っている」という言葉を感じる
 のです²⁶⁾

ズライカからハーテムに向けた詩である。
 ズライカはハーテムに視線を求める。「歌び
 との巻」の「告白」という詩のなかで

隠すことが難しいものは何か、それは火だ
 昼なら炎がそれをもらしてしまう
 夜ならお化けのような火だ、さらに隠すこ
 とが難しいのは
 愛だ、どんなに秘めていても
 目から容易に現われ出てくる²⁷⁾

という表現があるが、視線を通して愛は露
 わにされる。ズライカはハーテムのその視線を
 求める。そしてその視線の中に永遠の言葉を
 感じ取る。主語のない形で始められ、そこに
 私という主語がつけられ、更にズライカとい
 う名が現われ、視線のむけられているのは私、
 ズライカであるとの自覚が語られる。こうし
 てズライカはハーテムに愛されているのが自
 分であることを強く感じていく。

注

- 1) Johann Wolfgang Goethe Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens, Münchner Ausgabe, hrsg. von Kar. l. Richter (以下 M.A. とする). Bd.11.2. S.209f
- 2) M.A.Bd.11.1.2. S.15.
- 3) M.A.Bd.11.1.2. S.67.
- 4) M.A.Bd.11.1.2. S.68.
- 5) M.A.Bd.11.1.2. S.601.
Katharina Mommsen, Goethe und die arabische Welt. S.548
- 6) The Encyclopaedia of Islam, New Edition, Leiden, 1960-2004, Volume X, S.599.
- 7) Katharina Mommsen, Goethe und die arabische Welt. S.551.
- 8) M.A.Bd.11.1.2. S.67.
- 9) Goethes Werke. Hg. im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen. 133 in 143 Bdn. Weimar 1887-1919 (Abt.I-IV) (以下 WA. とする)、III.Abt. S.123ff、IV.Abt. S.58f.
Marianne und Johann Jakob Willemer, Briefwechsel mit Goethe, Dokumente, Lebens-Chronik, Erläuterungen, Herausgegeben von Hans-J. Weitz. Frankfurt am Main 1965. (以下 Briefwechsel とする) S.291.
- 10) Briefwechsel.. S.11f.
- 11) Ibid. S.292.
- 12) M.A.Bd.11.1.2. S.67.
- 13) Denkwürdigkeiten von Asien in Künsten und Wissenschaften Sitten, Gebräuchen und Alterthümern, Religion und Regierungsverfassung, aus Handschriften und eigenen Erfahrungen gesammelt von Heinrich Friedrich von Diez. Erster Teil: Berlin. 1811. S.254.
- 14) Ibid. S.239.
- 15) Ibid. S.254
- 16) M.A.Bd.11.1.2. S.68.
- 17) Ibid. S.69.
- 18) Im Namen Goethes, Der Briefwechsel Marianne von Willemer und Herman Grimm, Herausgegeben und eingeleitet von Hans Joachim Mey, Insel Verlag, 1988, S.230.
- 19) 詩人としてのマリアンネについては高橋健二著『ゲーテ相愛の詩人マリアンネ』(岩波書店、1990)がある。
- 20) M.A.Bd.11.1.2. S.69.

- 21) 『西東詩集』:「愛の巻」について」(『愛国学園大学 人間文化紀要』第18号46, 47ページ。
- 22) M.A.Bd.11.1.2. S.604.
Der Persianische Rosenthal: In welchem viel lustige und angenehme Historien/ scharfsinnige Reden/ nützliche Lehr-und Grundregeln/ Sententzen und Sprüche enthalten; Wobey auch Des Persianischen gelehrten und berühmten Lockmans Gedichte und Fabeln zu finden sind. Ein Werk/ welches ohngefehr vor 500 Jahren von dem damals berühmten und tieff-sinnigen Poeten Schich Saadi, In Persianischer Sprache beschrieben/ seiner Würdigkeit wegen hoch gehalten/ von vielen geliebet/ und endlich vor etwan 50 Jahren von dem berühmten Authore Adamo Oleario. Hamburg, 1694. S.74.
- 23) M.A.Bd.11.1.2. S.69.
- 24) Ibid. S.70.
- 25) Ibid.
- 26) Ibid. S.70f.
- 27) Ibid. S.13.